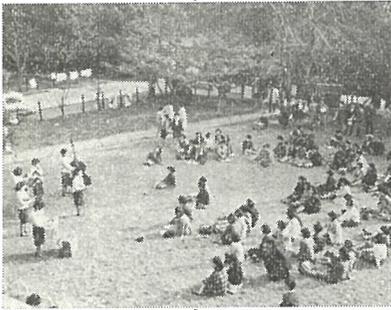


ビッグシスター

リトルシスター

谷川和子



1
本学では、従来より、集団活動による教育成果を重視し、種々なグループ活動が助成されて来た。特に、教師と学生、学生相互の交流、そして、宗教教育の場として、修養会、キャンプ・リーダーシップトレーニングなどの実施に努力が重ねられて来たのであるが、その成果の一つとしてビッグシスター・リトルシスター活動がある。

この活動の起りは、学生数の増加にともない入寮を希望しながら余儀なく下宿をするようになった新入学生たちが、一日も早く大学生活に慣れるように、必要なアドバイスを提供することを願って一九五七年に誕生したのである。

活動実施にあたり、当初は全学生の中から(1)宗教部に属している学生

(2)京都在住の自宅通学生の三・四年次学生

(3)同郷の上級生

など三点により候補者が選ばれた。これは、同志社に学ぶ者として、キリスト教精神の理解を助けることを願ったため、そして、家庭を離れた下宿生を自宅に招き、家庭の雰囲気

を伝えることも励みになることなどを考え、なお三・四年次学生を選んだことは、大學生生活の経験を生かしたアドバイスが与えられることを願ったため、そして、入学当初方言による緊張感を和らげることや、地方の共通話題による親しみなどを考慮した。以上の理由に基づいて、候補者に活動説明書を送ると同時に、活動に協力してほしいことを学校から依頼した。その結果受諾した学生、すなわちビッグシスターは八十二名であった。一方新入下宿学生全員に対して、ビッグシスター紹介希望の調査をしたところ、八十名が紹介を希望し、参加理由として大多数が知人・友人を持たない不安感をあげていた。

まず、出身地・下宿住所など地理的事情や趣味・その他希望事項を参考に両者を組合せた。そして、ビッグシスターになることを受諾した学生に、学校から委嘱する形をとり、双方に紹介すると共に連絡をとった。その後、個々の交友が開始され、郵便・電話などの連絡がとれたという報告が送られて来た。このようにして、入学式以前からの活動は、大學生生活の出発に際して大きな勇気づけとなったようで、新しい生活に順応すること、

および友人を得ることなどが比較的早くみられ、ビッグシスターは目立たぬ形のつながりとなって行った。これは活動説明に、四月から夏期休暇までを一期間として……など説明があったため、入学当初の活動に重点がおかれていたが、リトルシスターにとっては、相談のつてくれるビッグシスターがあるというだけで心丈夫だから、期間を決めないよう希望する声もあり、長く交わりを続けたケースもいくつかあった。こうして一九六〇年には、第一回のリトルシスターが最上級のビッグシスターとして活躍するまでになり、六十%がリトルシスターの経験を有する学生で構成されるに至った。

2

この活動の初期は、学校から依頼するのが唯一の方法であったが、次第に自主的参加への機運が熟してきた。それは、この活動と前後してキャンパにたいする学生たちの積極的参加が年々盛んになり、キャンプ経験を有する学生たちが活動に協力を申し出るようになった。この自主的傾向を助成するために一九六一年には、全学生を対象にビッグシスター

を募集することになったのである。すなわち、活動説明の資料を掲示すると共に配布し、参加希望の学生たちはカードに記入のうえ、学生課に提出することとなった。この時、個々に来る限り面談し、良いコミュニケーションを持って出発が出来るよう留意した。以上のようにビッグシスターは、漸次自主的参加がみられるようになると同時に、初期においてリトルシスターは新入下宿学生のみを対象としていたのに対し、遠距離通学生の増加とそれともなう種々の問題事例などを考慮して、寮生以外の新入学生、すなわち、学寮では上級生と交流が比較的容易なため除き、新入学生全員を対象にすることになった。このため全新生に配布される、しおり々にビッグシスター活動の紹介を記載し、参加希望の学生のみカードを提出させる方法を採用したのである。こうして、リトルシスターもビッグシスターと共に全く自主的に参加する活動となった。

しかし、一九六一年から一カ年の活動を検討するとき、個人と個人のつながりにおける活動の中に種々なよろこばしい成果がみられる一面、問題点としてビッグシスターに対し

て、リトルシスターが活発であったり、あるいは内向的すぎたりという性格的な異和感から人間関係がスムーズにゆかなかつた事例、また、相談にこないリトルシスターに対してビッグシスターとして、一体何をして良いのかといった不安感などの点が把握できたことと、一名のビッグシスターに二名のリトルシスターの組合せによる活動も、可能となつて実証されてきたことなどにより、一九六三年からは個々のつながりからグループ活動へ発展できるように、

(1) ビッグシスター・リトルシスター合同の会の充実。

(2) ビッグシスターグループ活動の充実。

(3) 学内カウンセリングシステムと関連をもつた活動の方向づけ

などの点に、努力することになった。

まず、郵便・電話などの連絡が主となる入學式以前の活動事情から、第一回の合同の会をオリエンテーション期間中に実施したことは両者の交友を深めると共に、活動をスムーズに進行させるようになった。

次にビッグシスターのグループ構成は、学科・学年・種々な事情を考慮して作成さ

れ、各グループにはリーダーおよびサブリーダーが選ばれた。グループごとにはもちろん、ビッグシスターの相互提携に努力が払われ、予想以上に良い働きを表現し相互の事例・意見の交換は種々な不安感を解くと共に横のつながりとして発展がみられ、ビッグシスターとしての自覚・連帯感を強め、向上しようとする研究意欲が感じられるようになった。

更に、学内におけるカウンセリングシステムと関連をもった活動として、アドバイザー（教授）とアドバイジー（新入学生）の懇談の機会が一九六三年より増設され、リトルシスターがこの会に参加している時に、これに併行してビッグシスターの集りを開催することになった。こうして例会は回を重ねるとともに活発化し、会を開く場合の準備をはじめ、プログラム進行にも自主的な協力が多くなってきた。

3

ビッグシスターを対象に実施したアンケートによると、表示の仕方は種々あるが全学年を通じて嬉しかったこととしてあげている筆頭は、信頼され相談をうけたことが次に、

小さな善意に感謝されたこと、そして同志社に学ぶ者としての連帯感を感じたことなど。

困ったことは、相談にこないことをあげている。学べたことは、活動に参加して自分自身の成長にプラスしたことを多数が述べており、人間関係の正課の実践の場として学べたことをあげている。また、善意を押しつけてなく伝えることのむずかしさをあげながら、これらの経験のできたことをよろこびとして表わしていた。

一九五七年より一九六四年の活動経過を考察するとき、

数的に増加はみられるが、全学生の一・五%から二%である点。

ビッグシスター活動にキャンプ経験を有する学生の参加が多くなり、一九六三年には二五%、一九六四年には四一%をしめるに至った。

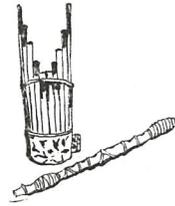
ビッグシスターが、個々の活動にのみ終ることなくグループとしての活動にまで発展がみられた点、およびリトルシスターも入学当初だけに終らず、年間通してビッグシスターとの合同の会のプログラム実施がみられた点などが認められた。

同時に、キャンプにおけるカウンセラーが、キャンパーたちとの交友をキャンプ期間のみに終らせず、これをチャンスとして年間を通じてグループ形態を持ちつつ、上級・下級学生の間心のつながりを持続している点においてこの活動が、ここ数年の間にキャンプ、およびリーダーシップトレーニングとの有機的な関連において発展して来ている姿がみられる。本年は特に参加数が増加し、ビッグシスターグループごとの活動の活発化、また、カウンセリングについて研究の希望が湧いて来たことなどを考え合せるとき、今後にな種々な問題は残されているが、Student Counselorとして活躍出来る時も、近い将来に実現出来るのではないかと期待をもつのである。小さな善意が大きなよろこびをもたらず活動として発展することも合せて。

（女子大学学生主事）

「絶えずと歌へ」は

雅楽の唱歌か



大西善明

一「絶えずとうたへ」の

末句は「はやし詞」か

平家物語の卷二「額打論」の一節。興福寺の二人の大悪僧、観音房と勢至房とが、一人は「白柄の長刀しんがたなつき短かにとり」他の一人は「黒漆の太刀くろしやう持つて、二人つと走り出で、延暦寺の額を切つて落とし、さんざんに打ち破やぶつて歌つたと言ふ、

うれしや水、鳴るは滝の水、

日は照るとも絶えずとうたへ。

の末の句「絶えずとうたへ」の意味を、古典文学大系本の註では、

終りの「とうたへ」は流布本に「とうたり」とあり「蕩たり」の意と解される。

「とうたへ」は「と、歌え」とも解けるが

「とうたへ」でも「とうたり」でも、はやし詞であろう。

と解している。右の歌謡は、中古においては、広く世に流布していたものと見え、当時のいろんな文献に散見する。謡曲の「安宅」「柏崎」「翁」などでは、末の句が「絶えずとうたり」と繰り返えされ、その意味は「どんなに日が照つても、いつもどうと音を立てている」と解されている(同大系本 謡曲集註)。

また同様の歌句は、義経記の「衣川の合戦」の条にも、太平記高時の最後の条にも、見えている。いずれの場合にも、末の句の「とうたり」を「はやし詞」と解するのが普通である。これらの歌詞の源と思われるものに、平安末に編集された梁塵秘抄の中の四句神歌の歌

謡がある。勿論直接の継承関係があるか否かは不明であるが。

滝は多かれど、うれしやとぞ思ふ。鳴る

滝の水、日は照るとも絶えでとうたへ、

やれことつと。

右の歌の末の句について、近刊の古典文学大系本梁塵秘抄の頭註には、次のように説明されている。

「とうたへ」後に「とうたり」と流布し、

滝の流下する形容に転。「と歌へ」の意ら

しい。「やれことつと」は「はやし詞」

とする。

これで見ると註者志田延義博士は「とうたへ」を原と解し、その意味は「と歌へ」であると解されたらしい。後に「とうたり」に訛つたとする考えは、新註平家物語で、石村貞吉博士が「とうたりはたうたりの訛で、『蕩たり』の意か。『蕩たり』は水の盛んな貌」とする説を承けたものであろう。

「とうたり」を「蕩たり」と解するのは、あまりに朗詠口調にすぎで、この歌全体の持つ俗謡調とは、そぐわぬ感じがする。かと言つてまた「と歌へ」とする説も、内容から言つて、落ちつかない。そこで「とうたり」を

もつて意味のない「はやし詞とする」といって苦しい解釈が生じてくるのであろう。とかく意味不明の個所に出会うと「はやし詞」として片づけてしまう悪い傾向が国文学界にはある。謡い物であるから、何でも「はやし詞」にしておけというのでは困る。催馬楽などにはとくにその傾向がひどいように思われる。

二「とうとう」は

「はやし詞」にあらず

源氏物語の巻の名にもなつて有名な催馬楽「総角」の末の句などが、それである。

総角や、とうとう
尋ばかりや、とうと
う
離りて寝たれども、
賑びあひけり。とう
とう
か寄りあひけり、と
うとう

まだ前髪の若い
衆ら、トウトウ
六尺離れて、や、
トウトウ
亘いに離れて寝
ていたに、
いつの程やら、
寄り添うた。
トウトウ
あち寄り、こち
寄り、寄り添う
た。トウトウ

別に歌の意味は、ここでは問題でないけれども、当時の風俗が面白いので、試みに口訳してみた。さて末の句の「とうとう」は、頭註でみると、いずれも「はやしことば」であると説明されている。

また同じ催馬楽の「大宮」を見ると、

大宮の西の小路に、
漢女子産だり。
漢女子産だり。
たたりやりんたなり

大宮の西の小路
に住居する、
粋な洋妾が子を
もけた。
まだ若いのに子
を、もけた。
タラリヤ、リイ
ン、タンナリイ

この末の句「たたりやりんたなり」も、旧説では「はやし詞」と見ているようである。以上の「とうとう」「たたりや」などということばは、果してこれまで言われて来たように、単なる「はやし詞」として片づけてよいものであるか。当代における「はやし詞」とは、果してどんな意味を持つものであったろうか。私は、これら「とうとう」「たたりや」を、旧説のように、単なる「はやし詞」とは

見ていない。それでは、これをどのように説明すればよいであろうか。

三「とうとう」は笛譜

ここでふたたび平家物語を引き合いに出す。謡曲にも出ていて有名な「小督」の一節「小鹿鳴くこの山里と詠じけん嵯峨のあたりの秋のころ」世をかくれ忍ぶ小督の局を訪れた仲国が、小督の弾く想夫恋の曲にあわせて、横笛でもって合奏するというくだり、腰よりやうでう抜き出だし、ちつと

鳴らいて門をほとほとたたたけば、

問題は「ちつと鳴らい」たところにある。右の「ちつ」は、「やうでう」つまり横笛(雅楽に用いられる)の音を示したものであることは明らかである。「ちつ」といったのは、童笛を習うに際して、メロディを歌う、いわゆる唱歌における発声であろう。当時の想夫恋(正しくは)も、今と変わることなく平調であったろうが、鎌倉時代の童笛の譜というのは、漢字ばかりで穴の名と音階とを示したものでありであるから、実際にそれがどのように唱歌されていたのかは、明らかでない。現存する童笛仮名譜というのは、近世以降のものばかりである。

五「とうとう」はトウトウ・

タラリから来たもの

さてここで、最初の「鳴るは滝の水」にかえって末の句の「とうたへ」をながめるとしよう。この「とうたへ」は、もともと「とうとう」ではなかったか。そして一越調の「音取り」のトヲトオと何らかの関係があるのではなかったか。

催馬楽の「総角やとうとう」も同様、私は笛のトヲトオと無関係なこととは思われない。さらに催馬楽「大宮」における末の句「たたりやりんなり」についても同様に、一越調においては、しばしば用いられている次の句が想い浮べられるのである。例えば蘭陵王の箏策の譜で、

チロタア、リ・タハレ、レ・……

………ト、リ、ラ、ラ、ハ、リ、タ、リ・チ、ラ
とあるタア、リイ・リタ、リイなどが。

明治撰定箏策譜における曲目は「春鶯囀 踏・同入破・迦陵頻急・蘭陵王等々、全部で十二曲ある。それからの曲の中には、多かれ少かれ、かならず右のタア、リイが含まれている。一越調以外の調子ではタア、リイが使

われることは、やまれである。しかしだからとて、右の「大宮」の曲が、かならずしも一越調であったと断定することはできないし、「鳴るは滝の水」「総角や」などが平調であったなどと言うことはなおさら危険である。

六 むすび

以上を要するに、これまで「はやし詞」として、無造作に取り扱われて来たいくつかの末句を、雅楽の用語をもって再検討してみる必要があるように思うのでこの拙論を草したのである。しかし何でも彼でも、意味不明の語なら、笛や箏策の譜であったとすることもまた危険である。意味のない単なる「はやし詞」もあろうし、語調をととのえるにすぎない場合もあることだから注意を要する。その好例として、最後に今一つ催馬楽から、誰でも知っている有名な歌謡をあげて結びとす。

酒を飲^ちべて飲^ちべ酔^ちうて、

たふとこりぞ参^まで来る。よろばひぞ参^まで来る。参^まで来る。参^まで来る。

右の「たふとこりぞ」について、古典文学大学の頭註(四頁)には、次のように述べ

られている。

たふとこりぞ——擬声語。いまなら「とろんとろんで」「ぐでんぐでんで」などといったところ。「後抄」は……ダンと倒れる音に解したが、それにも及ぶまい。擬声語に理窟をつけようとするのは、よけいな話である。「入文」は、これを「たんなたりや」などの笛の譜にこじつけ、酔っぱらった足どりが拍子にかかるさまだとするが、もちろん珍解の部に属する。

勿論熊谷直好の説く「ダンとろんで」ではない。また守部説「タンナタリヤ」というのも、笛譜からは遠ざかりすぎる嫌がある。しかし小西説の「とろんとろんで」もいかか「ぐでんぐでんで」というに至っては、苦しまぎれの推測の域を出ない。これは「はやし詞」でも、笛の譜でもない。「たもとほりぞ」が訛ったものである。「た」は接頭語、「もとほる」は「徘徊し、ためらう意」である。酒に酔って、足もとふらふらと、あちちによろけ、こつちによろけしながら、まっ直には歩けない酔態を言い表わした言葉なのである。

(女子中高教諭・園語)